世界大学が目指す
人間教育と理想の人間像 (2)*

——ワーズワースの精神の神髄——
新しい世界

森　谷　峰　雄

1. 魂の圧制者——憎むべき人間の敵——

ワーズワースの詩風は，『序曲』9巻からその趣が変わり，現実世界，人間社会への不義，圧制，陰謀に対する予言者的態度が強くでている。彼はフランスのある都市で一人の出フランス革命に参加した兵士に会う。

One, reckoning by eyars,
Was in the prime of manhood, and erewhile
He had sate Lord in many tender hearts,
Though heedless of such honours now, and changed:
His temper was quiet mastered by the times,
And they had blighted him, had eat away
The beauty of his person, doing wrong
Alike to body and to mind... (IX, 143—50)

(彼らのなかの一人で，
年令からいえばまだ男盛りで，たしか昔は

* 本論は1989年7月16日小牧久時平和財団，世界大学，フランス国際大学，地球みどりの会連合主催「絶対平和への四段階，連続公開講座」第4回分科会講座（世界大学講座リーズ）その後1989年9月14日世界大学42回年次大会 "Facing a New Millennium in Education—A Global Perspective on Educating for Peace" で英文で発表したものに加筆，補足したものである。

そうした男の誉れには，いまではまったく無頓着になっている者がいた。
随分多くの女性たちの心を支配したはずなのに，すっかり変わり果て，
彼の気性までが，時勢によってすっかり和らげられ，
生気を奪われ，端麗な容姿も，あわれ無惨にむしばまれ，
ついに精神までも，肉体と同様に，害ねられてしまったのだ。）

この兵士は，何故，このように見るかげもなく，精神も肉体も傷ついたのか。かつては理想に燃え，心も明るかったであろうに。この有為の青年に何が生じたのか。彼は政治家にだまされていたのである。

Now do I feel how I have been deceived,
Reading of Nations and their works, in faith,
Faith given to vanity and emptiness... (IX, 173—75)

（今こそ，はっきりわかったのだが，自分は騙されていたのだ。
諸国家およびその為すところを信頼して眺めていたが，
その信頼は，じつに無常なむなしいものに捧げられていた。）

彼は恐らく，時の権力者の見映えぶりに心を奪われたのであろう。その概観が，“vanity,”“emptiness”であるとは気づかなかった。それが国家の権威を着ているが故に。これに較べて，イエズス・キリストはその見えない姿であっても，真の人の救い主であり，彼に忠実である者を最後まで忠実でいて下さる。この世の君と神の御子と何と大きな相違があることか。しかし，詩人ワーズワースはこのような華美，高位，王位には目をくらまされなかった。

Yet in the regal Sceptre, and the pomp
Of Orders and Degrees, I nothing found
Then, or had ever, even in crudest youth,
That dazzled me... (IX, 212—15)

（当時はもちろん，それ以前の年端もゆかない若年の頃でさえも，じつに
あの帝王のもつ笏にせよ，高位高官のみせびらかす虚飾にせよ，
何ひとつとして，私の目をくらませるようなものは存在しなかったのだ。）

彼に人間社会の本質を見抜く力があったのである。それは，この世を支配する者は，二流の者であることを知っていたからである。

but rather what my soul
Mourned for, or loathed, beholding that the best
Ruled not, and feeling that they ought to rule. (IX, 215—17)

（それどころか，この世を最良のものが支配していないのを目撃し，
最良のものこそが世を治むべきであると痛感して，
嘆かわしく思い，嫌悪の情さえ抱いたものだった。）

人の上に立ちたがるものはその社会の二流の人士であることは，当時も今も，いづこの社会にあっても大体変わらない。まことに優れた者は他人の権利を尊ぶ余り，他人の正当な権利までも踏みつけて，自分がのさばることを恥じるからであろう。大体，上に立ちたがり屋は，あくの強い，我執に固まり，野心をもち，自分の出世の邪魔になるものがいると，あらゆる小策をろうして，直接的，間接的に彼を倒し，社会的にひそかに人格を傷つけていく。そのような，人が，小権力者たちとして，いばっているのが，社会である。これを，ワーズワースはまことに敏感に感じ取ったのであろう。このような，横暴な権力者たちの犠牲となった人々に，ワーズワースの同情は向いていく。

...tears have dimmed my sight,
In memory of the farewells of that time,
Domestic severings, female fortitude
At dearest separation, patriot love
And self-devotion, and terrestrial hope

Encouraged with a martyr's confidence. (IX, 275—80)

（家族との離別，最愛のものから引き離されてじっとこらえている女性のすがた
ひたすら国を愛してやまない自己犠牲的精神，
殉教者のような確信に鼓舞されて燃えたつ，あの
理想を現実に実現しようとする熱烈な情熱，
それらを思い浮べて，思わず涙が私の目を曇らせてしまったのだ。）

しかし，かような小権力者の犠牲にされても，なお，気高い心を持って，ますますその品性を磨き，愛情に富み，貧しい人々に対して奉仕するタイプの人がいる。現在で言えば，マザー・テレサのような人である。このような人こそ，キリストの系列に連なり，天国に生きている人々である。スウーデンボルグ流に言えば，"celestial degree" にいる人である。将校の中に，他と違ったタイプの人がいた。彼は除け者にされ，嫌われていた。しかし，彼は次のような人である。

A meeker Man
Than this lived never, or a more benign,
Meek, though enthusiastic to the height
Of highest expectation. (IX, 298—301)

（彼ほど優しく
親切な人は，いままでこの世に存在しなかったほどで，
やさしくはあっても，高らかな理想に対しては
このうえなく情熱を燃やしていたひとだった。）

心の柔和な人で，最高の理想には熱情的であった。その上，

Injuries

Made him more gracious, and his nature then
Did breathe its sweetness out most sensibly
As aromatic flowers on alpine turf
When foot hath crushed them. (IX, 301—5)

(人々の侮辱をうけて,
彼はいっそう寛大な人になっていった。あの頃の彼の性格は,
まるで,踏み砕かれればますます,ふく郁と芳香を放つ
アルプスの草原に花咲く草花のように,
ひときわ,きわだってその甘美な魅力を放っていた。)

傷つけられても,破壊されず,却って寛大になる。アルプスに花のように,その香を放っている。

By birth he ranked
With the most noble, but unto the poor
Among mankind he was in service bound
As by some tie invisible, oaths professed
To a religious Order. Man he loved
As Man, and to the mean and the obscure,
And all the homely in their homely works,
Transferred a courtesy which had no air
Of condescension... (IX, 309—17)

(生まれは
きわめて高い身分だったのに,まるで,
聖職授与式で宣言される誓いさながらの,ある
目に見えない絆によって,とりわけ貧しい人々に対する
奉仕ということが,彼に課せられたのだ。彼は人間を,

人間として愛した。身分の卑しい人々，無名の人々，
つつましい仕事につつましくいそしんでいるすべての人々に，
彼は特別の好意を示していた。それは決して
恩着せがましい態度でなくて……）

人を人として愛すること，これこそキリスト・イエズスの説かれた愛であった。それは，すべての命は神に由来するからであり，人を人として愛するのは，神を愛することである。このような，人こそ，本来の指導者であろう。しかし，前にも触れたように，現実の社会（宮廷）は品性の下等な者が治めている。

where the Man who is of soul
The meanest thrives the most, where dignity,
True personal dignity, abideth not,
A light and cruel world, cut off from all
The natural inlets of just sentiment,
From lowly sympathy, and chastening truth,
Where good and evil never have that name,
That which they ought to have, but wrong prevails,
And vice at home. (IX, 354—62)

（そこでは，もっとも下劣な人間が，もっとも幅をきかせているのだ。
また，そこは，尊厳，つまり，
真に人間的な尊厳などはかえって通用せず。
澄んだ情緒の，ごく自然なほとばしり，
つつましい思いやり，人の心を洗ってくれるような真実さ，
そうしたものから一切きり離された，じつに
軽薄で惨酷なひとつの世界であり，またそこには，
善と悪とが，それぞれ本来の名称をすっかり取り違えて邪悪がはびこり，
悪徳が居すわっている場所なのだ。）

柔和に生き，心の純真なもの，信仰にあって神を敬い，人格観念を持つのもは，彼が属する社会において，だいたいこのような体験をするのである。ワーズワースは，よくぞそのことを歌ってくれたと私は彼に感謝する。彼こそまことの詩人，予言者である。低俗な人士の支配するところ，人間の尊厳は顧みられず，道徳も，信仰も有用しない世界である。そこに社会の改革の精神が起ってくるのである。

We added dearest themes,
Man and his noble nature, as it is
The gift of God and lies in his own power,
His blind desires and steady faculties
Capable of clear truth, the one to break
Bondage, the other to build liberty
On firm foundations, making social life,
Through knowledge spreading and imperishable,
As just in regulation, and as pure
As individual in the wise and good. (IX, 362—71)

（それから二人はもっと重大な問題，
すなわち，人間とそれから神の賜物であり，しょせん
神のちからのうちにある人間の崇高な性質などについて，
それから，人間の盲目的な願望と，明晰な真理の把握を可能にする
人間の着実な能力について語り合い，前者は人間を束縛している絆を打破し，
後者は，ひろくゆきわたる滅びることない知識を通じて，
社会生活をできるだけ紀律正しいものにし，
賢人や善人において見られるような，純粋で，
個性的なものにすることによって，社会的自由を
確固とした基盤の上にうちたてるべきものと考えた。）

社会の改善は，学校教育，教会，家庭全般に拘る改革に通ずる。人間はひとりひとり神に由来するものである。神以外の人間が独裁することを，ワーズワースは心から憎んだ。

Yet not the less,
Hatred of absolute rule, where will of One
Is law of all, and of that barren pride
In them who, by immunities unjust,
Betwixt the Sovereign and the People stand,
His helper and not theirs, laid stronger hold
Daily upon me, mixed, with pity too
And love... (IX, 503—10)

（だが，依然として
一人の国王の意志が，万人の法律となるような独裁的支配を憎悪し，
また不当な特権によって，国王と民衆との中に割り込み
民衆の味方ではなく，国王の味方となる連中のもつ
ある不毛な傲慢さへの憎しみ，そうしたものが
日毎に，私に強い支配力を持つようになってきて，あわれみと
愛とにじり合うのだった。）

個人の尊厳と独立，慈しみと道徳を愛する詩人にとって，尊大な一人の人間の大衆支配は決して相容れない。そうでなくとも，個々は主の主，王の王であるイエズス・キリストを愛している。その前に，人間すべて被造物として，全く，同等な存在である。その人間が他人の尊厳を犯すのは神が禁じていることである。そうでなくとも，独裁主義から派生するのは，多くの人々の不幸，貧困である。彼らは，精神的のみならず，物質的に他人の尊厳を犯し，自らの権力に己惚れる。彼らの祖先はニムロッドである。ミルトンのみならず，信仰を持つ人々は圧制と独裁をこの上なく憎んだ。それ以前に生ける神は彼らを憎ん

でいる。大なり，小なりの独裁権を心から憎んだ。それ故に，神は彼およびその一味に罰を与えることは歴史の証明するところである。それは，神は心から愛する多くの人間が彼らの横暴によって，不幸にさせられるからである。憎むべき，この圧制者，良心の掠奪者である。ワーズワースはその一例を飢えた苦しむ一人の少女に見出している。

And when we chanced
One day to meet a hunger-bitten Girl,
Who crept along, fitting her languid self
Unto a Heifer's motion, by a cord
Tied to her arm, and picking thus from the lane
Its sustenance... (IX, 511—16)

（こうした折に，
たまたまある日，飢えにさいなまれている一人の少女に出会った。
彼女は子牛のようにのろのろと，腕に巻きつけた綱を頼りに
力のぬけた身体をよろめかせながら，
ようようの思いで，小道で食物をあさっていた。）

ワーズワースは，圧制の終ることを信じている。

...we should see the earth
Unthwarted in her wish to recompense
The industrious, and the lowly Child of Toil,
All institutes for ever blotted out
That legalised exclusion, empty pomp
Abolished, sensual state and cruel power
Whether by edict of the one or few,
And finally, as sum and crown of all,

Should see the People having a strong hand
In making their own Laws, whence better days
To all mankind. (IX, 524—34)

（やがてこの大地も，本来の意志を妨げられることなく，
営々と働く人々，つつましい苦役の子らにも十分報いられるだろうし，
差別待遇を法律化するすべての規則や慣習は，
今後，永久にぬぐい去られるだろう，また，空々しい虚飾も
淫蕩な栄華も，冷酷な権勢もやがては，
一人または少数者の布告によって，休止符がうたれることだろうし，
また最後に，これらすべての総決算として，
国民が自らの法律をつくる強力なちからを獲得し，
それによって，より良い日々が人類全体に及ぶのを
見とどけられるだろう，と。）

このように，希望を抱く一方，邪悪に対してワーズワースの心は痛みを感じると同時に，その対決の方法をも考えているのである。

Yet did I grieve, nor only grieved, but thought
Of opposition and of remedies... (X, 128—29)

（とはいえ，やはり私は心を暗くしていた。しかも，
ただ暗くしていたのではなく邪悪に対する抵抗と，その救済のことを考えたのだ。）

執拗な邪悪に対して，詩人は霊的な苦闘を戦っている。邪悪が勝ち，正義が破れるのだろうか。ワーズワースは邪悪の理論的敗北を考える。確かに，この世はまだ，少数の独裁者によって支配されてはいるが，それは外見上である。実際には独裁者以上に実質的力を持つ「普遍的本性」(One Nature, X, 140)

が万民の支配者である。この本性はすべての人間に存在する。まだ世が不完全であるのは，人々がこの本性を十分に活かし切れないからである。そのために，詩人は次のように，提案する。

a mind whose rest
Was where it ought to be, in self-restraint,
In circumspection and simplicity,
Fell rarely in entire discomfiture
Below its aim, or met with from without
A treachery that defeated it or foiled. (X, 152—57)

（人間の心というものは，
本来の拠るべきところ，例えば，自制とか周到さ，とか素朴さなどに
根拠をおけば，めったに目指す目標を完全に取り逃すことはなく，
また，そうした計画を妨害したり，
挫折させたりするような，外部からの
策略に出会うこともないだろう...）

真理の勝利を確信することが勝利を早め，実現化する。なぜなら，「普遍的本性」に反する独裁は力を得ないからである。独裁者は強いように思われるけれども，その内部は空洞化していて脆い。

...tyrannic Power is weak,
Hath neither gratitude, nor faith, nor love,
Nor the support of good or evil men
To trust in, that the Godhead which is ours
Can never utterly be charmed or stilled,
That nothing hath a natural right to last
But equity and reason... (X, 167—73)

（独裁的な権力とは，すなわち力の弱いもので，
そこには感謝も信頼も愛もなく，また，
善良な人々からも，悪党たちからも，安心して
支援を求めることができないものだ...）

独裁権力（tyrannic power）は感謝もされず，信頼も，愛も得ない。ただ，へつらいの者にしか，支持されない。たとえ，力を持ったとしても，それは恐怖の力，死刑とか左遷のおどかしによって，統制している。人民ははっきりとした証拠によって希望が確実であるにもかかわらず，その希望に信頼しきれないから弱い。その弱さを独裁者は利用している。少し，希望を持つものがあれば，たちまち，その人を独裁者は暴力と虚為で葬ってしまう。しかし，正義は決して神にとって裏切られない。この世に幸不幸を考えない。神にあって生きることこそ，勝利者である。少数の姦知の輩が大多数の正気を狂気へと駆り立てる。世の善人と称される人々もその群れに加わってしまう（X，346—49)。自分の由来が神であるということを忘れるときに，あらゆる無力，卑屈，慾，野心が生じてくる源となろう。既に，良心に死んでいる人々にとっては，何らの苦痛にはならないこと，たとえば，自然崇拝，人間崇拝は，信仰に生きている人々には耐え難い苦難であろう。しかし，詩人は苦難の意義を悟ったのである。

Then was the truth received into my heart,
That under heaviest sorrow earth can bring,
Griefs bitterest of ourselves or of our Kind,
If from the affliction somewhere do not grow
Honour which could not else have been, a faith,
An elevation, and a sanctity,
If new strength be not given, or old restored,
The blame is ours not Nature's. (X, 422—29)

（その間に，私のこころのなかに
次のような真実が理解されるようになったのだ。つまり，
この地上で，どれほど痛切な悲しみに会い，また，
個人的な，あるいは人間全体としての，どんな辛い悲しみに出会っても，
そうした苦悩をなめながらも，どこかに，もしもその苦悩がなければ，
決して得られなかったような尊厳，ひとつの信念，
高らかな心，高潔さが生れてくるようでなければ，
もしも，新しい力が与えられ，古い力が回復されるのでなければ，
それは自然の罪なのではなく，われわれ人間の責任なのだということが。）

人類の憎むべき，圧制者がいかに攻め，攻撃しようと，否，そのような苦悩があるが故に，人はより高貴に，より人間らしくなるのである。また，そうならなければならないのである。ここに，人間に精神の揺るぎない，独立と自由がある。これこそ，人間を人間たらしめている根本的原理である。圧制者もこれに対し，決して踏みつぶすことはできないのである。神に感謝せよ。

2. 人間性の回復——普遍の心

ワーズワースはロベスピエールとその一派の失脚を喜んだけれども，フランスの故国との参戦，アネットとの交わりの断絶，などにより，ひどい絶望の中にあった。その彼を救ったのは，他ならぬ彼の妹ドロシィと友人コルリッジであった（X，904—15)。ワーズワースの魂の回復はその自然観によく表現されている。

Ye motions of delight, that through the fields
Stir gently, breezes and soft airs that breethe
The breath of paradise, and find your way
To the recesses of the soul! Ye Brooks
Muttering along the stones, a busy noise

By day, a quiet one in silent night... (XI, 9—14)

（野原を静かに吹きわたるよろこびの息吹よ！
楽園の風を吹きよせ，人間の魂の奥底までも
吹き込んでくる，しずかな風よ，そよかぜよ！
岩々のまわりを，つぶやきながら，昼は昼で
にぎやかな音をたてて，またひそかな夜には
そっと声をひそめて流れゆく，君たち小川よ！）

詩人は，人間の邪に気をかけずに，自然界に深い喜びを見出している。これはもちろん，現実逃避ではない。人間に課せられた大きい責任を知っているが故に，他人の独立と自由を知るが故に，また，他人の固有の責任は他の誰も負うことができないことを知るがゆえに，詩人は一人自然にあって神と平和を享受しているのである。人にとって必要なものは神のみである。神との絶対的な平和喜びである。これこそ，人間の最も大切な宝である。ワーズワースはこれを今心に抱いているのである。このようなとき，人は大勢の人々を要しない。全くの一人でも十分なのである。このような時，彼は自然に純粋の喜びを得るのである。

The morning shines,
Nor heedeth Man's perverseness; Spring returns,
I saw the Spring return, when I was dead
To deeper hope, yet had I joy for her,
And welcomed her benevolence, rejoiced
In common with the Children of her Love,
Plants, insects, beasts in field, and birds in bower.
.....
...in Nature still
Glorying, I found a counterpoise in her,

Which, when the spirit of evil was at height,
Maintained for me a secret happiness.
Her I restored to, and loved so much
I seemed to love as much as heretofore... (XI, 22—36)

(今，朝日が照り輝いている。が，
人間のよこしまなど，気にかけていない。いま，春がめぐってくる。
深いよろこびなど，少しも解らなかった頃でも，すでに私は
春が必ず，めぐりめぐるのを，まのあたり見ていた。その頃でも私は
春のよろこびを味わい，春の慈愛を歓迎し，
植物や昆虫，それに野原に群がる家畜や，木蔭の小鳥たちなど
春の愛から生れたすべての子らと一緒に，私は喜びを共にしていたものだ。
(一部略)
依然として私は大自然のうちに
大いなる喜びを感じつつ，大自然のうちに精神の均衡を保つ錘を見出していた。
そしてその錘が，悪霊がのさばっていた最中にも，
私のためにひそかな幸福をしっかりと守っていてくれたのだ。
やがてまた私は，大自然のふところに立ち帰り，このうえなく自然を愛し，
以前にまさるとも劣らず，自然にひきつけるような感じがした。)

先程に，彼の魂を回復させたのは，コールリッジとドロシィであると言った。しかし，彼の心には，腐らずにいた根があったのである。この根があったればこそ，彼の魂は表面的に枯れていても，蘇ったのである。その根とは何か。それを詩人は次のように歌っている。

The laws of things which lie
Beyond the reach of human will or power;
The life of natrue, by the God of love

Inspired, celestial presence ever pure;
These left, the soul of Youth must needs be rich,
Whatever else be lost, and these were mine. (XI, 97—102)

（人間の意志や能力の，とうてい届かないところにある
事物の法則，慈悲深い神によって鼓吹され，常に穢れない存在としての
自然の生命，こうしたものが残されていれば，
他のどのようなものを失ってしまっても，なお，若者の魂は
きっとゆたかなものであるに相違ない。事実そうしたものが私に
残されていたのだ。）

「自然の命」(the life of nature) があれば，愛の神の霊感するところとなる。この回復の補助役となるのが，「自然の霊」である。魂の回復には，自然が持つ魂が力を付すのは事実である。

Oh! soul of Nature, excellent and fair,
That didst rejoice with me... (XI, 138—40)

（おお！　すばらしく，そして美しい自然のたましいよ，
そなたは私とともに喜びに浸り.....）

自然には人間の魂に及ぼす感化力がある。しかし，先にも述べたように，人の魂の回復には魂の中に，「自然の生命」が根本となるのである。そして，それはすべての人に存在している。この意味では自然の力は補助的即ち，第二義的である。

There are in our existence spots of time,
Which with distinct pre-eminence retain
A renovating Virture, whence, depressed

By false opinion and contentious thought,
Or aught of heavier and more deadly weight
In trivial occupations, and the round
Of ordinary intercourse, our minds
Are nourished and invisibly repaired;
A virtue by which pleasure is enhanced,
That penetrates, enables us to mount
When high, more high, and lifts us up when fallen.
This efficacious spirit chiefly lurks
Among those passages of life in which
We have had deepest feeling that the mind
Is lord and master, and that outward sence
Is but the obedient servant of her will. (XI, 258—73)

(われわれ人間存在には，とりわけくっきりと
目立って，人の命をよみがえらせてくれる力をそなえた
いくつかの時点があるものだ。それは，われわれの魂がそこから
たとえ，間違った意見や疑わしい観念によって，あるいは
瑣末な雑事の重々しい，まったく気のめいるような
重荷や日常の交わりの繰り返し，そうしたものによって
すっかり打ちひしがれてしまっても，やがてそこから魂が
滋養をとり，外目にはわからぬように回復してゆける力，
われわれの喜びの度合が高まり，われわれの内部に浸透し
われわれを高く，ますます高かめるようにしてくれ，
たとえ転落しても必ずわれわれを救い上げてくれる力を持っているものなのだ。
このような優れた効力をもっている，いわば精霊は，主として
人生の旅路のうちでも，人間の精神が主人公となっていて
外面的な知覚は，精神の意志にきわめて従順な従僕にすぎないことを

深い感動をもって，われわれが体験できるような，
そうしたふとした小道にひそんでいるものなのだ。）

ワーズワースはそれを，神の救いの恵みとして受けとっている。

With trite reflections of morality,
Yet in the deepest passion, I bowed low
To God, who thus corrected my desires... (IX, 373—76)

（月並の道徳的な反省もあるかも知れないが，
事実，ほんとに深い感動をもって，私は，このように
私の欲望を矯正してくれた神のみまえに深く頭を垂れたものだった。）

彼は，上から分かるように，決して自然宗教者ではなく，人格を持った神を第一に考えている。神への感謝なくして，何の良きものは出てこない。自然の回復力もその恵みであって，それが第一原因ではない。そして，或る程度回復の芽が出てきた後には，自然の持つ大きな回復力によって，人間の魂は静けさと感動を自然から受けるようになる。

From Nature doth emotion come, and moods,
Of calmness equally are Nature's gift,
This is her glory... (XII, 1—3)

（自然から感動が来る，そして静けさの
気風も同じく自然の賜物なのだ，
これこそ自然の栄光.....）——拙訳

この二つの "emotions" と "moods of calmness" が自然の栄光なのである。この二者の交互作用によって，人は「心の平静」を得る（"that happy stillness

of the mind" (XII, 13—14)。そして,「より賢い気風」(the wiser mood") が偽りの価値観から人の魂を救う。この気風で世の中を見ると,彼はその中に無価値なものを見出す。

Ambition, folly, madness in the men
Who thrust themselves upon this passive would
As Rulers of the world...

(人々の中に野心,愚かさ,狂気,それらは
この受け身の世の中に,この世の支配者のように,
でしゃばっている...)——拙訳

この社会には,無価値なものが多い。人間に必要でないものに,人々は力を入れている。そのように,詩人の魂には見えてきたのである (XII, 168—78)。彼はそれだけ,神の国に近付いたのである。この世から,彼の世に移って行ったと思われる。それが次の一本の道に表現されている。

I love a public road: few sights there are
That please me more; such object hath had power
O'er my imagination since the dawn
Of childhood, when its disappearing line,
Seen daily afar off, on one bare steep
Beyond the limits which my feet had trod,
Was like a guide into eternity,
At least to things unknown and without bound. (XII, 145—51)

(私は広い公道が大好きだ。これ以上楽しませてくれる
眺めはほかにはない。少年期の明けそめ時から,
さらに向こうの,とある禿山の彼方に,遠く遠く消えてゆく

一本の道すじを毎日ながめていると，ふと，
永遠の世界への，少なくとも，未知の，そして無限なものへの
道しるべのような感じがしてきて……

以上の内容から分かるように，特に，道を「永遠の世界への，道しるべ」としているところに，ワーズワースはこの現世からかの世に移る準備が整いつつあるように思われる。彼はこの散歩の途上にこの世の空しさを思い，これらは天国においては一つの価値をも有しないことを悟っている。特に，人々が「普遍の心」(“the universal heart”, XII, 219) を無視しているところに，現世的罪がある。この「普遍の心」とは外観のきらびやかさとは全く異なる。

How oft high service is performed within
When all the external man is rude in shew,
Not like a temple rich with pomp nd gold,
But mere mountain-Chapel such as shields
Its simple worshippers from sun and shower. (XII, 226—30)

（人間の外面が，どれほどその見かけでは粗野であっても，
そのこころの中では，どれほどしばしば，敬虔な祈りが
なされていることだろうか。それは，黄金で華麗に飾りたてられた
寺院などとは似ても似つかず，日ざしや驟雨などから
質朴な信徒をしっかりと守ってくれる，飾らない山中の教会に似ている。）

「敬けんな祈り」を捧げる心こそ「普遍の心」である。

Others, too,
There are among the walks of homely life
Still higher, men for contemplation framed,
Shy, and unpractised in the strife of phrase,

Meek men, whose very souls perhaps would sink
Beneath them, summoned to such intercourse:
Theirs is the language of the heavens, the power,
The thought, the image, and the silent joy;
Words but under-agents in their souls;
When they are grasping with their greatest strength
They do not breathe among them: this I speak
In gratitude to God, who feeds our hearts
For his own service, knoweth, loveth us
When we are unregarded by the world. (XII, 264—77)

(そのほかに，つつましい生活を観察する散歩の途上には
もっとすぐれた人間たちもいるのだ。深い瞑想に適するようにつくられ，
引き込み思案で，言葉のやりとりには不慣れな人，
魂はその胸のうちに深くに秘められていて，そうした
親しい交わりの時にその魂が呼び出されてくるような，人当たりの優しい
人達，
そうした人たちの語る言葉は，天上のことばにもふさわしく，
力と思想の形象と，落ち着いたよろこびにあふれ，しかも
その一語一語は，彼らの魂のほんの補助役にすぎないのだ。
あらん限りの力をつくして，その意味を把えようとしても，
所詮，そうした意味はここにはないのだ。以上のことを
私は神への感謝として語っている。神は，自らのつとめとして
われわれのこころを養い，われわれが世間から全く無視されようとも，
神はわれわれを心にとめ，われわれを愛し給うのだ。)

「普遍のこころ」とは祝福された，天上の心，優しさ，柔和であり，そのような人は既に天国に入っている。物像的空間ではなく，霊的空間的意味において。このようなことこそ，世界大学の理念であり，世界大学の人々である。こ

の世界は新しい世界なのである。私は，ここに世界大学に共通する理念がワーズワースに芽生えているのに気づかれる。彼はより具体的にこの世界の実在，その像を次のように，描いている。

I seemed about this period to have sight
Of a new world, a world, too, that was fit
To be transmitted and made visible
To other eyes, as having for its base
That whence our dignity originates,
That which both gives it being and maintains
A balance, an ennobling interchange
Of action from within and from without:
The excellence, pure spirit, and best power
Both of the object seen, and eye that sees. (XII, 370—79)

（事実この時期に，ひとつの新しい世界が見えてきたような
気がした。それは，他の人々にも伝えることが出来，
彼らの目にも，はっきり見えるように整えることもできる，
そうした世界なのだ。というのは，それは，その基盤として，
人間の尊厳が，真にそこから湧き出てくるもの，それを
生み出すとともに，均衡をしっかりとたもち，内面と外面からの作用の，
人間を高貴にするあの交互作用ということを踏まえているのだ。
それは，見られる対象と，見ているまなざしとの
その双方が卓越することであり，もっとも純粋な
生気であり，また，最善のちからなのだ。）

「新しい世界」(a new world, 1. 371) が，世界大学の「世界」の内包する意味である。だからこそ，普遍性があるのである。この世の，いわゆる「世界」ではない。従って，この点において，世界連邦の「世界」でもない。しかし，空想でもない。否，既に実在する世界なのである。それだからこそ，ワーズワー

スはそれが「見える」ように感じている。その内包は「人間の尊厳」「人間を高貴にさせる」「純粋な力」「最善の力」の源である。詩人の中で，之ほど，世界大学の精神の在り方を説明したものはないであろう。それは，コメニウスの教育理念と一致する。

3. 世界大学人としてのワーズワース

世界大学に生きる学者がいかなる人間であるか，それはワーズワースの思想によく現れている。天界に生きる，詩人の魂の在りかたが知られる。

They need not extraordinary calls
To rouze them, in a world of life they live,
By sensible impressions not enthralled,
But quickened, rouzed, and made thereby more fit
To hold communion whit the invisible world.
Such minds are truly from the Deity,
For they are Powers; hence the highest bliss
That can be known is theirs, the consciousness
Of whom they are, haritually infused
Through every image, and through every thought,
And all impressions; hence religion, faith,
And endless occupation for the soul
Whether discursive or intuitive;
Hence sovereignty within and peace at will,
Emotion which best foresight need not fear,
Most worthy then of trust when most intense;
Hence chearfulness in every act of life;
Hence truth in moral judgements and delight
That fails not, in the external universe. (XIII, 101—19)

（彼らの心を奮い起こさせるためには，何の特別な呼びかけを
必要としない。彼らが呼吸している生命の世界にあって，
彼らは決して感覚的印象などのとりこになっているのではなく，
それによってさらに生き生きとなり，奮いたち，目に見えない世界との
まじわりを行うのにもっとも適切な状態になるのだ。
このような精神のもち主こそ，まさしく宇宙創造の神に由来するのだ。
というのは，彼らには神性があるのだ。したがって彼らは
人間の考えられる限りの最高の精神の歓びをわがものとなし，
一切のもののすがた，一切の思考，一切の印象を通して，
常日頃，間断なく鼓吹されることによって，
自己の創造主を自覚し，そこから宗教なり信仰なりが生れ，
推論的にせよ，直覚的にせよ，魂にとっての
終りのない勤めが生じて，そこからまた内面の
主権が生れ，自在に平和が獲得され，また
情緒がどれほど強烈に動いても，このうえない配慮によって少しも
案じるほどのことはなく，十分信頼していてよいのだ。
こうして日常生活の一つ一つの行為が楽しくなり，
そこからまた道徳的判断も公正になり，喜びは，
外面的宇宙のなかにあって，決して挫折することがないのだ。）

彼は心の在りかたとして，目に見えない神の祝福の国を霊に感じることが出来る。人格なる御子の存在が実体として感じられる。彼は，このように，生きているのである。この世界にある者には霊的なる祝福が下っている。人間が復活するためにはキリストのように，その神に対する関係つまり，義が完全でなくてはならない。しかし，人間にはそれが不可能である。しかるに，救い主なる，神の御子・キリストはその義を私達に与えて下さったのである。この義によりて，人間はその信仰によりて，自ら，義ではないのに完全な人間として認められて復活させられるのである。それは，一番深い平和である。この平和が人間のすべての中で最もよい賜物である。それ以外のものは，すべて，いかに

偉大な業でも消滅し，これに較べると全く糞土に過ぎないからである。[1]

このような神聖な魂を持つ人格にとって，この世の利害関係は害がある。彼はむしろ，この世の利益に対して，超越しているべきものである。そのことをワーズワースは次のように語っている。

I never, in the quest of right and wrong,
Did tamper with myself from private aims;
Nor was in any of my hopes the dupe
Of selfish passions; nor did wilfully
Yield ever to mean cares and low pursuits;
But rather did with jealousy shrink back
From every combination that might aid
The tendency, too potent in itself,
Of habit to enslave the mind, I mean
Oppress it by the laws of vulgar sense,
And substitute a universe of death,
The falsest of all worlds, in place of that
Which is divine and true. (XIII, 131—43)

（善悪を求める際には，私は一度たりとも，私的な目的のために
自己を左右させられたためしはないし，どのような
希望を抱いても，けっして利己的な情熱にまんまと
騙されたこともなかったし，卑俗な心遣いや
低俗な追求には，頑として断じて身をまかせることもなく，
それどころか，精神をとりこにしてしまう，つまり，

(1) この点に関して，ワーズワスはその認識を深めており，それを彼の詩 *The White Doe of Rylstone* (1815) に歌い上げている。佐藤清はその著『Wordsworth』(研究社，昭和55年) において，解説して言う，「この詩篇は幻滅を歌い，諦観 (renunciation) を歌ったもので，一切は消え去る雲のようなものであるが，自然と心と，神の平和だけが永遠なるものになることを述べたものである」(114頁)。キリストによる救済のみが究極の宝であることを受け入れた者には当然のことであろう。

通俗的な意味でのさまざまな法則によって
精神を圧迫し，神聖にして真実な世界を，
あらゆる世界のうちで最悪の，死の世界に
すりかえてしまう，そうした惰性という，それ自身
きわめて強靱な傾向を助長する性質をもった
一切のかかわりあいに対して，私は細心の注意を払って
わが身をそこから遠ざけてきたのだ。）

心の高尚なものが，卑しい利害関係に引き回されるべきではない。それは身を奴隷にする死の世界である。心の高尚な人格こそ一番大切なものである。

ワーズワースは人間の愛よりも高尚な神の愛を知っていた。

but there is higher love
Than this, a love that comes into the heart
With awe and a diffusive sentiment;
Thy love is human merely; this proceeds
More from the brooding Soul, and is divine. (XIII, 161—65)

（それよりもさらに高い愛が
あるのだ。身のひきしまるような畏怖と限りない
情愛とをもって，心にしみわたるような愛が。
君の愛は，単に人間的であるにすぎない。それに対して，
この愛は，静かに瞑目するひとの魂から生れ，神聖なものだ。）

この愛の人格が，聖霊によってみごもった，乙女マリアからナザレで生れた神の御子キリスト・イエズスである。先ず，認識すべきことは神の国があるということ，つまり，この，人間の水準でいえば「霊的実在」，神の水準で言えば「現実そのもの」が明らかに存在するということ，御子の罪の許しによりてそれを受け入れるすべての者に完全なる義が与えられるということ。このこと

が理解されないと，キリストの有り難さ，神の愛の意味が分らないであろう。まして，たといある個人にとって最も深くて，真実であろうとも，人間的愛よりも神の愛の方が優れている理由が分からないであろう。[(2)]

クリスチャンにとって，喜びとは救いの確かさの喜びであって，いわば，保証のある喜びであろう。この点において，いわゆる神秘主義者のいう「こうこつ」とは本質的に異なるのである。神秘主義者の喜びは，「糠喜び」に過ぎない。何らの保証もない。ワーズワースは救いの確信の喜びを次のように歌っている。

And so the deep enthusiastic joy,
The rapture of the Hallelujah sent
From all that breathes and is, was chastened, stemmed,
And balanced, by a Reason which indeed
Is reason; duty and pathetic truth;
And God and Man divided, as they ought,
Between them the great system of the world,
Where Man is sphered, and which God animates. (XIII, 261—68)

（こうして，深い熱狂的な歓喜，息づきそして実在している

(2) 英文学史上，神の愛より，人間の愛を重んじた作家は George Eliot である。彼女は終に神の愛の本当の価値存在理由を知らずに終った人であろう。人がキリストの罪の許しの清めの血を信じ受け入れなければその人にどんな偉大な行いがあり，人情があったとしても同じく地獄に行くであろう。人間の罪とは真に根深くて，人間の手では決して除去できない。もちろん，どんな偉大な自然科学者でも，医学者でも，幾百万人のアインシュタインも，マザー・テレサもできない。それほど罪の恐ろしさははかり知れず大きい。天国とは，この世とは，違うのである。人間の罪一点でも許されない。この世に生きたその有様が死後の霊的状態となるのである。つまり，生前，その精神的本質が御子のそれに等しい人間はキリストの方に向って光の方，天国に行き，それに反する人間はそのいかなる善行にも拘らず耐えることが出来ず，その逆の方向に走るのである。生前，不可思議にも，キリストの神聖と罪の許しとを信じ得て，義の冠を受けたものは一人残らず，他と同じその罪深い体と心にもかかわらず，絶対的に天国に向い得る。その罪はすべて，神の御子によりてあがなわれているからである。そこにおいて初めて，神の御子の絶対性が喜びと共に知られる。それが神の愛なのである。十字架の愛なのである。このことを認識しないで，神の愛を説くことは出来ない。

一切のものから送られてくる，あのハレルヤの
歓喜は，正真正銘の理性といえるある理性によって，
また，義務感と，悲愴な真実とによって，
浄められ，鎮められ，そうして均衡を与えられ，
こうして神と人間とは，当然そうすべきことなのだが，
人間はそこに取り囲まれ，神がそれに生命を与えるというように
世界の大いなる体系を，その両者の間で分割したのだ。）

これこそ，人間の存在の根本を示すものである。我々は神に帰って最も幸福であるのだ。

この敗退と汚濁と恥辱の世の中で生きていく目標を掲げて，この偉大な詩『序曲』は終結している。

Then, though, too weak to tread the ways of truth,
This Age falls back to old idolatry,
Though men return to servitude as fast
As the tide ebbs, to ignominy and shame
By Nations sink together, we shall still
Find solace in the knowledge which we have,
Blessed with true happiness if we may be
United helpers forward of a day
Of firmer trust, joint-labourers in the work
(Should Providence such grace to us vouchsafe)
Of their redemption, surely yet to come.
Prophets of Nature, we to them will speak
A lasting inspiration, sanctified
By reason and by truth; what we have loved
Others will love; and we may teach them how;
Instruct them how the mind of man becomes

A thousand times more beautiful than the earth
On which he dwells, above this Frame of things
(Which, 'mid all revolutions in the hopes
And fears of men, doth still remain unchanged)
In beauty exalted, as it is itself
Of substance and of fabric more divine. (XIII, 431—52)

（その時こそ，たとえ現代が真理の道を歩むには，
あまりにも弱腰のために，古い偶像崇拝にたち帰りつつあろうとも，
たとえ民衆が，潮の退くように再び，たちまちのうちに
奴隷的屈従の状態にもどり，それぞれの国家ごとに
汚濁と恥辱の淵に転落してゆこうとも，それでもなお，
私達は，現在もっている認識のうちに慰めを見出すことが出来，
真の幸福にあずかることが出来るのだろう，もし私達が
より強い信頼のもてる日を，互いに促進し合い，
人間の救済という，まさにこれからの仕事に
（もし天の配慮で，そのような恵みが私達に与えられるなら）
二人で手をたづさえて従事するようなことが出来さえすれば。
大自然の予言者としての私達は，彼らに語りかけるだろう，
理性と真理によって，神聖なものに純化された
あの永続的な霊感を。そして，二人が心から愛してきたものを
彼らも愛するようになるだろう，また彼らにその経過を教えよう，
どのようにして人間の精神が，住んでいるこの大地よりも
幾百倍も，さらにさらに美しくなるのかということ，それからまた
事物の構造（それは，人間の希望や不安の
あらゆる転変のさなかにも，依然として，何ら
変化することのないものなのだが）それよりもさらに
神聖な実体と構造とを，この精神自体がもっているために，
事物よりもさらに美しく高められるのだということを。）

ここで，ワーズワースは人間の魂の絶対的価値を述べている。物質よりも，人間の魂がいかに価値あるものかを。それゆえにこそ，人はこの世の生活を尊び，高め，美しくすることが要求されているのである。この世での心の在りかたが死後に継続されるのであるから。しかし，一般大衆は相も変わらず，物質の価値を，目に見える良いものしか追求しないようである。ここに，予言者の必要性がある。絶えず，人々に神を思う機会を与えることが必要であるのだ。世界大学の機能の一つは，このような予言者としての働きであろう。世界大学を実現することは，ワーズワースの志をこの世に今に活かすことになる。人類の普遍の価値を追求するものは必然的にこのような結論に到る。コメニウスしかり，ワーズワースしかり，世界大学しかり，その他数えられない程の人々の結論である。結局の結論は地上の次元ではこの世のすべての命の源となられ，その後，ナザレに生れた方，天上の次元ではすべての権威である神の御子に帰結する。〔詩の訳は断りがない場合，岡三郎訳『ワーズワース序曲』（国文社，1983年）を用いた。記して訳者に謝意を表する。〕尚，参考文献についてはこの論が完結する次稿にして記載する。